

# 実権派リーダー・鄧小平が描く“遠大な構想” 中国民衆を総動員し“毛沢東”を吹っ切る

中国の国内情勢がまた流動化してきた。この政治潮流はどこから来てどこへ行くのか。当初から中国における“非毛沢東化の底流”を指摘してきた東京外大教授・中嶋嶺雄氏に今度の動きの焦点を語ってもらった。(文責編集部)

## 吹き出した“非毛沢東化”の底流

中国における非毛沢東化の動きは実は、いつ突破口が開かれてもいい形で熟していた。今日のような段階を予測させる要素は、毛沢東以後の中国の政治状況の中にすべて内包されていたのである。

四人組をあのような激しい形で非難しながら、毛沢東だけは神聖にして冒すべからざる存在であったのだが、そのことが大きな矛盾であることは、中国の民衆のだれもが気づいていた。

そして紅育夫人を蛇蝎のごとく嫌悪し、中世の魔女狩りを思わせるような粛清劇が行なわれたあと、すべての罪業、中国の政治、国内建設のすべてのマイナス面を四人組のせいにするという状況が進めば進むほど、それでは一体四人組をあそままで台頭させたのは誰か。その責任はどうなるのかという問題が残る。

こうした疑問は、すでに四人組批判の当初から潜在していた。同時に中国の社会主義建設の歴史上画期的な出来事であった、天安門事件——民衆の側からの痛烈な毛沢東体制批判——を抑え込んだ代償として、華国鋒が自らの地位を確立した事実



▲民衆に人気のある鄧小平副主席  
対しても、同じような疑念が渦巻いていた。

華国鋒の台頭そのものが、四人組打倒とならんで、これまでの中国の政治的角逐そのものの反映なのである。だから問題をつきつめれば、華国鋒自身に当然火の粉は降りかかってくる。

政治の動きというのはひとつのハズミである。ハズミがつけばひとつの方向に過熱してくることは避けられない。ことに、政治そのものが熾烈な権力闘争、党内闘争であり、しかもそれが常に大衆運動的な状況の中で展開される中国の場合には、ハズミがつくととめどもなくなる。

今度の出来事は、来たるべきものが来たのである。どの方向から来て、どの方向へ行くのか。

単なる華国鋒追い落としなのか、鄧小平と華国鋒との対立であるのか、あるいはもっとさかのぼって、毛沢東政治、中国のこれまでの社会主義建設路線そのものに対する再検討なのか——。少なくとも最近の動きを見ていえるのは、華国鋒の追い落としだけではすまされない問題、つまり明確な“非毛沢東化”という方向が大きな底流としてあるし、その底流



▲華国鋒の調整役は終わった？  
がここへきて地表に出始めたということである。

## 準備されていた実権派の復権

すでに、旧実権派勢力、文革で失脚させられた人達が大量に復活している。北京市をみてみよう。

かつて北京市の党委員会は実権派の牙城であった。党内の少数派に転落していた毛沢東といえども、「針一本、釘一本差せなかった」といわれる実権派の牙城が、北京市に再形成されているように思われる。

それは、文革派の幹部であった党政治局委員の呉徳が、北京市長、北京市革命委員会第一書記を更迭されたことに象徴的に現われている。その後、党の中心、とくに北京市を中心に実権派の党書記局のようなものが形成され始めたようだ。

一連の動きは準備されたものであり、かなり系統的である。単に壁新聞が貼り出されただけでなく、まず人民日報や光明日報が“实事求是——実践によって真理は検証されなければならないの意——のキャンペーンを展開し、一方で、“七十年代”とか“争鳴”など香港の左派系メディアが、一連の動きを水先案内してき

たという経過もある。

しかも日程的にみると、鄧小平はつい最近日本を訪問。初めて訪れた先進資本主義国で彼は大きなレッスンを受けて帰った。続いてすぐASEAN諸国歴訪に出かけて、北京に戻るや否や、人民日報、光明日報が姚文元批判の論文を掲げて、四人組に対してのみならず、実質的に毛沢東そのものに対する批判を展開した。

鄧小平がいなくても、そういう批判ができるような状況が存在しているのである。

もっとも状況はそう単純ではなくて、他方において、党の理論誌である紅旗はいぜんとして沈黙を守っており、あたかも逆流にさからっている観がある。

文化大革命の初期に、解放軍報が中央の機関紙として先行して、実権派打倒を掲げ、結局は人民日報もそれにならい、紅旗も崩れていったという経過をたどった。今度の場合もそれに似たパターンを取っている。

全体的な情勢としては、非毛沢東化が進んでいるにもかかわらず、内

部にはそれへの抵抗要因がまだ存在しているということだ。

しかしやがて、党大会その他で、毛沢東の革命経歴なり生涯に対する再評価、とくに晩年における過ちが根本的に洗い直されるという方向が予見される。スターリン批判と同じような、毛沢東批判が行なわれると考えてよい。

### スターリン批判と異なる点

だが両者は決定的に同じではない。そこには大きな違いがある。

スターリン批判の時には、スターリンの独裁が崩れていくこと自体、大変な衝撃であった。神話の瓦解があまりに大きかったため、スターリン主義が根強く存在していた東欧諸国では、ポーランド、ハンガリー動乱さへ起きた。

毛沢東批判の場合は、そうした衝撃的な偶像崇拜の破壊は、必ずしも必要ではない。むしろ、なしくずし的にすでに彼の権威は否定されてきている。また中国社会の中にはこれまでも、明白な非毛沢東化を指向した政治の動きが一貫して存在した。

それだけに毛沢東批判は社会的砦盤を持ったものであり、その批判はいまや華国録にも及ばんとしている。

四人組を批判しながら、毛沢東だけを擁護するという論理の矛盾が一挙に切開されつつあるのが、現在の中国の状況だ。

中国民衆の中には初めから、ある種の吹っ切れなさがあった。そこを誰かが乗り越えてくれないければ、いくら四人組批判といっても隔靴搔痒の感があった。それは、いかに4つの近代化の旗を振っても、また状況が変われば逆転するのではないかという民衆の不安でもあった。

そこを吹っ切るねらいが今度の毛沢東批判にはある。それを推進しているのは鄧小平であることに間違いない。鄧小平は再復活した時に、「自分の余生はあと7、8年ある」と言っていたことを考えると、余生を毛沢東批判にかけるのだという、秘められた戦略があったように思われる。中国民衆も鄧小平にそれを期待した。

しかも鄧小平はかつて、ソ連共産

▼天安門事件を「革命的行動」として正当化した北京市党委員会の決定が北京天安門広場で発表された(左)。その決定を報ずる香港の中国系新聞「大公報」(右)



党20回大会でのスターリン批判の洗礼を受けて、党規約の中から個人崇拝的な色彩を一掃した人物だ。そしてまた今日状況の中で、ここまで問題を展開しうるのは鄧小平しかない。

### 華国鋒とは一体何者か

そこで誰もが注目するのは、華国鋒とは一体だれかということだ。

華国鋒と鄧小平が四人組打倒のあと、スクラムを組んで四つの近代化を推進するのだといわれていたが、その見方が誤っていることはかつて週刊ダイヤモンド誌上でも述べた。革命の経歴からも、文革への関わりあいからも、また毛沢東との関係からみても、鄧小平と華国鋒の間には大きな亀裂があった。

中国ではひとの政治状況が流動化すると、指導者の過去の政治的経歴が洗いきらい批判されることがありうるだけに、毛沢東家父長制への批判が進めば進むほど、華国鋒にとっては不利な情勢が展開されることになる。

華国鋒の経歴で最もわからないのは、なぜ彼が毛沢東の故郷である湖南省湘潭県に、20年もの間党書記と

して存在していたのかという点である。彼は1950年代から70年代にかけて、ずっと当地に留っており、1955年に書かれた処女論文を読むと、書記といっても特務公安関係の仕事についていたことは歴然としている。

そうした経歴から、華国鋒がひよっとしたら毛沢東の血縁にあたるのではないか、との謎はいぜんとして解けない。しかも彼は林彪事件を処理するという形で中央に登場してきている。華国鋒が四人組打倒という一種の子防クーデクを一気になしえたのも、彼が特務公安関係を握っていたからにはかならない。

### 鄧小平の遠大な構想とは

今日、天安門事件の評価が逆転して、反乱側が正義の味方とされ、そのうえ毛沢東家父長制への批判が強まる状況となれば、華国鋒の経歴はどうみても不利となる。鄧小平失脚を代償にして自己の地位を確立した華国鋒の存在が、当然問われてくる。

四人組を批判しながら毛沢東を正しいというのが矛盾であるように、天安門事件は反乱の側が正しかった——五四運動に匹敵する“四五運動”であるという評価が行なわれなが

ら、その時に弾圧した側でクローズアップした華国鋒自身が問われないのは、もうひとつの大きな矛盾といえる。

それでは鄧小平がねらっているものは、華国鋒を追い落として、自分が主席になることかといえば、そうではなく、彼の構想はもっと遠大である。中国をどうするか、というところにあるのだろう。もともと鄧小平は恬淡であって、野心がないといわれてきた。だからこそ大胆な発言をなしてきた。

情勢のおもむくままに、鄧小平が党主席になり、華国鋒が失脚するという事態は十分にありうる。もしそんなことになれば、あまりにも筋書き通りであるし、内外に与えるイメージの損失も小さくないはずだ。

華国鋒の存在がある意味では時間の問題になりつつあることは明らかである。

だからこそ中国社会を近代化するためには、大衆の中にもやもやしていた、文革は誤りではなか、さらには毛沢東にも誤りがなかったかという疑念を、ここでハッキリさせることが必要になるのである。

(東京外国語大学教授中嶋嶺雄、談)

## 次号予告

12/9 特別号(12月4日発売)

緊急の場合は  
☆一部変更することがあります

〈緊急レポート〉 **総裁選 勝者の経済運営はこうなる**

**俺たちを犬死させた維新経営者 デミ熟す 最新30問30答**

〈特集〉 **異業種提携花盛り 奇妙な会社相関図**

予約購読料 50週:16,000円 100週:30,500円(別冊、臨時号は含みません) TEL504-6329